
しりとり

N澤巧T郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しりとり

【Zコード】

N7497H

【作者名】

澤巧一郎

【あらすじ】

仲良し4人組が、あまりにも暇なので『しりとり』を始めた。

放課後、4人はいつものように教室にいた。

過去の事も、最近の出来事も、散々しゃべってきた4人には、もう話す話題がなく、さきほどから無言の時間をすごしていた。

窓の外からは、部活動に汗を流す人々の声が絶え間なく聞こえてくる。

あまりにも暇だつたせいだろう。

ショウタが突拍子もない提案をした。

「じつとつでもするか」

カキーンと、野球部が金属バットでボールを打つた音が、教室の中に響き渡った。

四拍ほど置き、トモキが「えー？」と、あからさまな拒絶反応を見せた。

一方、リュウセイは「うー」と、まるでなにも聞かなかつたかのように見当違ひの方向を眺め続け、何の反応も示そうとしない。

ショウタも別に本当にじりとりがしたかつたわけではなく、この無言空間を打破するために発言しただけなので、拒否されようが無視されようが気にしていなかつた。

その証拠に、ショウタはすでにどうやつてじりとりに賛同してもらおうかとは考えておらず、次になんの話をしようかと頭をめぐらされていた。

その時だつた。

今まで黙っていたリクがおもむろに口を開いた。

「じゃ、じつとつの”つ”からね。りん！」

トモキは驚いている。

リュウセイは静かに目線だけをリクの方へと向けた。提案者のショウウタでさえ、あまりに予想外の出来事が起きたせいで、言葉を失っていた。

カキーン

その音を聞いたショウウタは、ハツと意識を回復させ、すぐさまトモキに向かい「ほら”い”だよ”い”」と、催促した。

「え? やるの?」と、戸惑いを見せながら、トモキはチラッと同意を求められるかもしないと思い、リュウセイのほうを見た。しかし、リュウセイはいつものようにどこかそっぽを向いて黙っていたので、トモキはあきらめ、「い? え。じゃあ、ゴコ」

「ハツ」

「早つ。まだオレ言に終わつてなこんですけど。すげえやる気満々じゃねえか」

リュウセイはトモキの「」を聞いた時点でのコラと自分がわり、すぐさまハツと発言したのだった。

続いてショウウタの番。

「じゃあ俺か。ええとね。い、い、い、ハツ」

それを聞いたリクは、「マ・・・・・・・」と、つぶせいたかと思つ

と、微動だにしなくなってしまった。

トモキが心配になつてリクの背中に手を向けた。

ゼンマイでもあるんじゃないかと思つたからだ。

そんな心配をよそに、リクは何事もなかつたかのように言つた。

「摩擦係数測定器」

「そんなんあんのかよ」と、すぐさまトモキが反応する。リクは「さあ?」と首を傾ける。

「知らねえのに言つちやた? 完全に思いつきじゃねえか」いつものようにつかかるトモキに対し、ショウタガ「まあ、別になくてもいいでしょ。なんかあるっぽい感じない」と、こつものようにならとした。

「あるよ」

いきなりココウセイが、つぶやくように意見を述べた。

「え? ホントにあんの? まさか~?」と、トモキが疑いのまなざしを向ける。

するとリコウセイは先ほじと回じ口調で「一八〇万」と、商品の値段を告げた。

「高っ! ? 自動車並みじやねえか」と、トモキは驚き、続けて「つてか、ホントか? 何で知つてんだよ」と、リコウセイに對して再び疑いのまなざしを向ける。

「調べりやわかる」と、リコウセイはまったく相手にしていないご様子だ。

「せひ、" も" だよ" も" 」

ショウタガトモキに向かつてしつとつを続けるよつと促した。

トモキは「わーったよ」とこつ鼻囁氣をかもし出しながら「”やい”ねえ」と考え始めた。

「じゃあねえ、救急自転車

「自転車かよ」と、ショウタがすぐに食いついた。

続いてリクが「急いでるなら自動車を使わなきゃ」と、注意する。「患者はどうすんだ?」と、リコウセイが質問すると、トモキは「え? そりや後ろの、子供を乗せるところに

「ただのママチャリじやん」と、リコウセイが的確なシグナルを入れる。

それを聞いてショウタが「たしかに」と、同意した。

「じゃあ次ね。あ、”しゃ”と”や”、”ぢ”じよつか」と、シ

ョウタが尋ねた。

すると「どっちでもよくね?」と、トモキができひつて答えた。

その答えを聞いてショウタは「じゃあどうでもいいから、好きなほう選んで」と、リコウセイに任せた。リコウセイはまつたく考へることなく、すぐさま答えた。

「車間距離不保持違反取締装置」

「やたら長いえつ……」

トモキが驚く。

「こいつたいて何のことなんかわからなー」と

ショウタが困惑する。

「嘘まないで言えたことがす”じこ”

リクが感心した。

「通称ホークアイ」

「やっぱり実在すんの？ いつたい何なんだよソレ」「調べりゃわかる」

リュウセイのいつもの返しが出たところで、ショウタは「”ち”ね。ち、ち、ち」と、ショックを受けているトモキをほつといてしりとりを開けさせた。

「ち、ち、ええ、超能力開発用右脳活性化力セットテープ」

まずはトモキから。

「パチくせえ。ってか完全にパチだ」

続いてリク。

「せめてCDに焼きなおして欲しいね」

そして、リュウセイが「いくら？」と質問した。

「今ならなんと、この左脳活性化力セットテープをセットで購入すると、もれなく全員に、脳全体活性化DVDをプレゼント…。」

「最後のがあれば、ほかの必要ねえだろ」と、リュウセイ。

「コレだけ揃つてイチキューパーの1万908円。1万908円でのご提供です」

「完全にボッタクリじゃねえか！ 高いにもほどがあるぞ」

「8円くらいどうにかできなかつたの？ 2円足して910円にしてくれたほうがまだマシだよ」

やはり最後はリュウセイが的確なコメントで閉めるのだった。

「まずはお前らが活性化しろよ」

はじまり（後書き）

今回のじつとり。

じつとり リンゴ ゴワラ ラッコ ハマ 摩擦係数測定器 救急
自転車 車間距離不保持違反取締装置 超能力開発用右脳活性化力
セットテープ

ニードル（前書き）

前回のじつとり。

じつとり リンゴ ゴフラ ラッパ ピマ 摩擦係数測定器 救急
自転車 車間距離不保持違反取締装置 超能力開発用右脳活性化力
セットテープ

「次は”ふ”だぞ”ふ”」と、ショウタがリクに向かつて言った。リクは「じゃあねえ」と、左上を見ながらつぶやくと、今度は深く考へることなく発言した。

「プチ整形キット」

「ぜつてえあぶねえじゃねえか。整形外科なんて素人が手をだしちゃダメだろ」
すでにおなじみ、トモキの『じゃねえか』ツツノミが飛び出した。続いてショウタ。

「韓国から輸入したっぽいよなあ。あつちじや流行つてゐみたいだし」

「内容は?」と、いつものようにリュウセイが掘り下げる。

「注射器でしょ。麻酔も必要。あとは……クエン酸?」

「健康にはいいけどな。あんまプチ整形じゃ聞かねえぞ。ヒアルロン酸ならシワ取るのに使うけど」

リュウセイがそういうと、リクはすぐに反応して、「ああ、それそれ。間違えた。」と、訂正した。

ショウタが「ほかには?」と、質問した。

「あとは、ほら、あの、ボツリヌス菌?」

またまた疑問符が出たところで、リュウセイが再び「ボツリヌス菌は自然界最強の毒素をもつてんだぞ?」と、コメントする。それを聞いたトモキが気が付いた。

「細菌兵器じゃねえか！…」 プチとかかわいい響きをつけてる場合じゃねえ

「 プチがかわいいかどうかはさておき、リクが言った。

「あれ？なんかボツリヌス菌を注射するとどうにかって言つてたなかつた？」

「 どうなんですかリュウセイ先生？」

「 ボトックスのことな」

「 ああ、それだそれ。たぶん」

「 ボトックスってなに？ボツリヌス菌に関係あんのか？」と、トモキが質問した。

リュウセイは「ボトックスってのは、ボツリヌス菌の毒素から抽出した成分で」と、言つたとこでいつたん動きを止めると、大きく息を一回吐き出しながら「調べりやわかる」と、めんじくわざうと言つた。

コレが出来たら、もう何を聞いても答えてくれないと知つているトモキは、自分から聞くのをやめにして、「”と”か。ええつと」と、自分からしつとりを再開させた。

「 じゃあ、トマト皮むき機」

「 え？もしかしてトマト専用？」と、ショウタが確認すると、トモキは「あたりめえじねえか」と、すぐに答えた。

「 普通の皮むき機しか想像できないね。てか、普通の方が万能だよね。もちろんトマトもむけるもんね」と、リク。

「 いいんだよ。もつトウルつて剥けるから。驚くほどキレイに剥けるから」と、トモキがジェスチャー付きで有効性を説明する。

次はいつものようにリュウセイの番だが、このリュウセイの発言が3人を驚かせることになる。

「 キュウイ皮むき機」

「え？ もしかして次、言つちやつた！？」と、リクが確認する。

「しかもパクリじゃねえか！－－皮むき機はオレの発明だぞ！？」と、トモキが反発する。

ショウタはあまりに予想外の出来事だったため、口を半開きにして固まっている。

そしてリュウセイは「いつものテンションで」「うへ、トウルつと」と、言いながらジェスチャーをつけた。

「そのトウルつもオレのじやねえか！－－皮むき機なんて使わないでスプーンで中をくつ抜いとけ！－－」と、トモキが違う方法を提案した。

すると、先ほどもまで固まっていたショウタが目を覚ました。

「あゅうつ皮むき機」

「パクリ反対！－－皮むき機に権利を！－－」と、トモキがわけのわからぬ権利を主張しました。

トモキのテンションはあがりまくっている。

「うへ、トウルつと」

「奇跡じやねえか！－－きゅううりでソレが出来たら奇跡だぞ！－－つか俺も見てみてえ！－－つてかパクるなつつの－－トウルには著作権が発生してんだぞ！－－死後50年有効だかんな！－－」

トモキのテンションは最高潮に達していた。

「そんなに皮むき機で熱くなるなよ」と、ショウタがトモキを落ち着かせようとする。

いまだに顔を真っ赤にしているトモキを見て、ショウタは続けて「もう皮むき機は使わないから、な。」と、説得した。

「な、なら、いいけどさ」と、いまだ少し興奮気味に了解するトモ

キ。

そんなやり取りを、ほんの少し微笑みを浮かべながら眺めていた、この騒動の張本人でもあるリュウセイが「じゃ、次」と、リクへとバトンを渡した。

「ああ、ええ、救急三輪車」

「オレのじゃねえか!!!! 救急もオレの!!!!」

再びテンションが最高潮に達したトモキをよそに、今度はショウタが「よけい遅い乗り物になっちゃったよ」と、指摘した。トモキのテンションが落ちる気配はないが、やはりリュウセイが冷静に的確なコメントを言つて、また次回なのである。

「キッザニアにもねえよ」

ニペー（後書き）

今回のじつとい。

プチ整形キット　トマト皮むき機

キュウイ皮むき機　あずうり皮

むき機　救急三輪車

アキバ復活（前書き）

前回のじつとい。

プチ整形キット　トマト皮むき機

キュウイ皮むき機　あずうり皮

むき機　救急三輪車

「つむごーー。オマハの番だつて」

ショウタがトモキに語りかかけても、トモキは机に突っ伏したまま起き上がりとしない。

「くッ。もうしつとりなんていいよ。みんなパクるし」

トモキは完全にこじけていた。

自分で考えた言葉が、みんなに良じよに流用されてしまい、それがトモキに大事なおもちゃを取られてしまつたような感覚を思い出させていた。

いの一番にトモキの言葉をかつぱりつたのはリュウセイだ。そのリュウセイはとくと、我、関せずといつ意思を表すよつこ、どこか見当違いの方を眺めている。しかし、その顔には若干の楽しさが滲み出していた。

「だつて、トモキがおもしろいから」

リクがあつからかんと言つ放つた。

トモキの体がピクッと反応を示した。その反応をショウタは見逃さない。

「やつだよなあ、まさかあそこで皮むき機だもんな。さすがだよな。発想が違うよね。なんていうんだるうね、神のお告げとでも言つていいぐらう、じつ、悟りを開かされたつていつのかな。そのぐらう笑撃的だつたよね」

ショウタは自分で何も言つていいのかわっぱりになりながらも、トモキが勘違いしそうな単語を並べ立てた。

リュウセイは見逃さなかつた。

突つ伏しているトモキのかすかに見える横顔から、口やりと伸びた口元を。

「じゃあ、オマエ負けで、俺が続けるからな。しゃ

次の瞬間、トモキが飛び起き絶叫した。

「シャンプー＆コンシス＆漂白剤！…」

ショウタは待つてましたと言わんばかりに呼応した。

「絶対肌に悪いだろ…！髪真っ白になつたから…！」

トモキが続けて効能を語つた。

「美白効果抜群」

対してリクが思つたことを素直に口にした。

「漂白と美白はちがうんじゃない？危険な匂いがふんふんするよ。あの漂白剤独特の匂いがふんふんするよ」

トモキが使い方を説明する。

「お風呂に入るときは夕食後のお皿も一緒に持つてつりや。そこで、頭を洗うついでにお皿もわざと洗つて、湯船に自分と一緒につけておくだけで、あら不思議。真っ白綺麗」

そして最後はこいつのようになりコウセイの番だが、やはりとこいつをさすがとこいつが、やつぱりリコウセイはどうにか違う視点を持つているのであった。

「食べ終わった後、台所で皿洗うついでに髪洗つてもいいよな」

トモキ復活（後書き）

今回のじつと。り。

シャンプー＆リンス＆漂白剤

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7497h/>

しりとり

2010年12月12日14時37分発行